

柳ノ本遺跡 1・2次

2018年

日田市教育委員会



遺跡遠景（東から）



1次調査全景（北から）

序 文

この報告書は、当委員会が平成26・27年に病院施設建設工事に伴って発掘調査を行った柳ノ本遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では弥生時代末から古墳時代にかけての甕棺墓や石棺墓などで構成された墳墓群や、中期末から古代にかけての竪穴建物などの生活遺構も発見され、対象地周辺の微高地に密集した集落と墳墓域が広がっていることが判明しました。昭和57年発見の壺棺の発見以来、この一帯は謎の弥生集落として知られてきましたが、今回の発掘は三隈川右岸の沖積地に広がる古代集落の一端を明らかにする貴重な発見となりました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

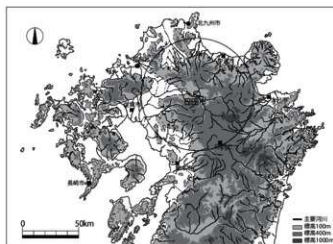
平成30年3月

日田市教育委員会教育長

三苫 眞治郎

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成26・27年度に実施した「柳ノ本遺跡1・2次調査」の発掘調査報告書である。
2. 調査は病院建設工事に伴い、医療法人利光会の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 最終的な調査面積は1次254㎡、2次496㎡となり、平成26・27年度年報に記載した面積は本報告をもって訂正する。
4. 1次調査は調査現場での実測を㈱九州文化財リサーチに一部委託したほかは写真撮影等は担当者が行い、2次調査では現場管理を一部㈱九州文化財リサーチに委託したほかは担当者が実測・写真撮影を行った。
5. 本書に掲載した1次調査の遺構製図は㈱九州文化財リサーチと㈱埋蔵文化財サポートシステム大分支部に委託し、遺物実測は雅企画(有)に委託し成果品を使用した。そのほかの製図は用松操の協力のもと担当者が行った。遺物写真撮影は雅企画(有)に委託した成果品を使用した。
6. 挿図中の方位は全て磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
7. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
8. 出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の執筆はIVを上原が行い、それ以外の執筆編集は渡邊が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

I 調査に至る経過と組織	
(1) 1次調査の経過	1
(2) 2次調査の経過	1
(3) 調査組織	2
II 遺跡の立地と環境	
(1) 立地と環境	3
(2) 昭和57年発見の喪棺について	4
III 1次調査の記録	
(1) 調査の概要	5
(2) 遺構と遺物	5
IV 2次調査の記録	
(1) 調査の概要	19
(2) 遺構と遺物	20
V 総括	36

挿図目次

第1図 調査区位置図(1/3,000)	2
第2図 調査区配置図(1/800)	3
第3図 昭和57年発見の壺(1/8)	4
第4図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	4
【1次調査】	
第5図 1次調査区全体図(1/100、1/40)	6
第6図 3・6号墓、出土喪棺実測図(1/20、1/6)	7
第7図 13号墓、出土喪棺実測図(1/20、1/6)	8
第8図 15号墓、出土喪棺実測図(1/30、1/8)	9
第9図 1・2号墓実測図(1/40)	10
第10図 4・5号墓実測図(1/40)	11
第11図 8・9・11・14・16号墓実測図(1/40)	12
第12図 7・10・12・17号墓実測図(1/40)	13
第13図 1号竪穴建物・カマド実測図(1/60、1/30)	14
第14図 1号掘立柱建物実測図(1/60)	14
第15図 土坑実測図(1/60)	14
第16図 1次調査出土遺物実測図(1/4、2/3)	16
【2次調査】	
第17図 2次調査区全体図(1/150)	18
第18図 2次調査区土層断面図(1/40)	19
第19図 6号墓、出土喪棺・遺物実測図(1/30、1/6、1/2)	20
第20図 2・3号石棺墓実測図(1/40)	20

第 21 図	1・4・5・7 号土坑墓、墳墓出土遺物実測図 (1/40、1/4)	21
第 22 図	1～5・7・10 号竪穴建物実測図 (1/80、1/60、1/30)	23
第 23 図	9・11～13・16～18 号竪穴建物実測図 (1/60、1/30)	25
第 24 図	14・15・19 号竪穴建物実測図 (1/60)	26
第 25 図	1～3 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/2)	27
第 26 図	4 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/3、1/2)	28
第 27 図	5～13 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/6、1/4、1/2)	29
第 28 図	14・15・17・18 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/2)	30
第 29 図	土坑実測図 (1/40)	31
第 30 図	土坑出土遺物実測図 (1/6、1/4、1/2)	32
第 31 図	溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)	33
第 32 図	その他の出土遺物実測図 (1/4、1/2)	33
【総括】		
第 33 図	遺構変遷図 (1/300)	37

写真図版目次

巻頭図版	遺跡遠景 (東から)	写真図版 4	① 5 号墓検出状況 (南西から)
	1 次調査全景 (北から)		② 5 号墓完掘状況 (北東から)
【1 次調査】			③ 8 号墓検出状況 (南西から)
写真図版 1	上段 調査区全景 (上が南)		④ 8 号墓完掘状況 (南西から)
	下段 調査区全景 (画面上が南西)		⑤ 9 号墓完掘状況 (北から)
写真図版 2	① 3 号墓検出状況 (北西から)		⑥ 11 号墓検出状況 (南西から)
	② 3 号墓完掘状況 (西から)		⑦ 11 号墓検出状況 (南西から)
	③ 6 号墓検出状況 (東から)		⑧ 11 号墓ガラス小玉出土状況
	④ 6 号墓完掘状況 (南から)	写真図版 5	① 14 号墓検出状況 (西から)
	④ 13 号墓 (北から)		② 14 号墓完掘状況 (西から)
	⑤ 13 号墓 (西から)		③ 16 号墓完掘状況 (南東から)
	⑦ 15 号墓 (南から)		④ 7 号墓完掘状況 (南東から)
	⑧ 15 号墓 (東から)		⑤ 10 号墓検出状況 (南から)
写真図版 3	① 1・2 号墓検出状況 (南西から)		⑥ 12 号墓完掘状況 (南から)
	② 1・2 号墓完掘状況 (南西から)		⑦ 17 号墓検出状況 (北から)
	③ 1 号墓検出状況 (南西から)		⑧ 1 号竪穴建物完掘状況 (南から)
	④ 1 号墓完掘状況 (南西から)	写真図版 6	① 1 号竪穴建物カマド完全状況 (南から)
	⑤ 2 号墓検出状況 (北東から)		② 1 号掘立柱建物 (西から)
	⑥ 2 号墓完掘状況 (北東から)		③ 1 号土坑 (北から)
	⑦ 4 号墓検出状況 (南から)		④ 2 号土坑 (南東から)
	⑧ 4 号墓須恵器出土状況		⑤ 6 号土坑 (南東から)
			⑥ 7 号土坑 (西から)
			⑦ 調査区東壁 (1 号土坑)
			⑧ 調査区北壁

写真図版 7 1次調査出土遺物

【2次調査】

写真図版 8 ①調査区南側発掘状況（西から）

②調査区北側発掘状況（西から）

写真図版 9 ①1号墓石蓋検出状況（南から）

②1号墓発掘状況（東から）

③2号墓石蓋検出状況（東から）

④2号墓発掘状況（南から）

⑤3号墓石蓋検出状況（南から）

⑥3号墓発掘状況（東から）

⑦4号墓発掘状況（東から）

⑧5号墓石蓋検出状況（南から）

写真図版 10 ①5号墓発掘状況（西から）

②6号墓検出状況（西から）

③6号墓発掘状況1（北から）

④6号墓発掘状況2（東から）

⑤7号墓石蓋検出状況（東から）

⑥7号墓発掘状況（東から）

⑦1号竪穴建物発掘状況（南から）

⑧2・3号竪穴建物発掘状況（北東から）

写真図版 11 ①11号竪穴建物発掘状況（東から）

②15号竪穴建物発掘状況（南から）

③1号土坑発掘状況（南から）

④2号土坑遺物出土状況（南から）

⑤2号土坑発掘状況（西から）

⑥3号土坑遺物出土状況（南から）

⑦調査区東壁土層（西から）

⑧調査区南壁土層（北から）

写真図版 12 出土遺物

写真図版 13 出土遺物

本文写真目次

本文写真1	1次調査作業風景	1
本文写真2	2次調査作業風景	2
本文写真3	1次調査指導風景	2

表目次

第1表	1次調査墳墓計測表	16
第2表	1次調査出土土器観察	17
第3表	1次調査出土ガラス小玉観察表	17
第4表	2次調査墳墓計測表	33
第5図	2次調査出土土器観察表①	34
第5図	2次調査出土土器観察表②	35
第6図	2次調査出土石製品・鉄器観察表	35

1 調査に至る経過と組織

(1) 1次調査の経過

平成26年3月19日付けで医療法人利光会より市教育委員会あてに、大字竹田字上深395-1ほかについて病院建設工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書(事前審査番号2013104)が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である柳ノ本遺跡に該当し、過去に近隣の畑より壺棺が発見されており、対象地に遺跡が存在する可能性が非常に高いことが予想されたことから、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後3月28日には予備調査依頼が提出され、これを受けて5月1～8日に重機と作業員による予備調査を実施した。

その結果、3本のトレンチのうち1・2トレンチでは砂礫層が広がり、砂層の一部に遺物包含層が認められたものの、明確な遺構の掘り込みは確認できなかった。一方で3トレンチではトレンチ東半分からは現地表面から約40～50cmの深さで安定した砂層が見られ、この面を掘り込んだ石棺墓や土坑、土器片などが確認されたことから、遺跡の存在が明らかとなった。

そのうえで、予定地の開発は全面が切土工法となることから遺跡の保存が困難であると判断し、遺構の確認された予定地東側部分の造成箇所(調査面積254㎡)を対象とした発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ねた。その結果、平成26年6月4日に事業主との委託契約を取り交わし、6月9日から7月24日までの間、発掘調査を実施した。また平成27年6月1日から平成28年3月31日の間整理作業を実施し、平成29年度に2次調査とともに報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

- 6月9日 重機による表土除去・遺構検出開始
- 6月13日 作業員による遺構検出および遺構掘り下げ開始
- 6月24日 墳墓の実測開始
- 7月1日 調査補助業務開始(有限会社九州文化財リサーチに委託)
- 7月11日 空撮実施
- 7月24日 器材撤収、現地での作業完了



写真1 1次調査作業風景

(2) 2次調査の経過

1次調査終了後の平成27年2月26日に医療法人利光会より市教育委員会あてに、大字竹田字柳ノ本645-2ほかについて病院建設工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書(事前審査番号2014085)が提出された。この開発は1次調査の対象となった病院新築に附帯するリハビリ施設新築工事で、1次調査区に隣接することから、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後3月23日には予備調査依頼が提出され、これを受けて5月27～29日に重機と作業員による予備調査を実施した。その結果、現地表面から約30～70cmの深さで石棺墓や竪穴建物、土器片などが確認され、1次調査とはやや異なる生活遺構が密集しており、発掘調査が必要であると判断した。そこで、開発主と協議を重ね、建物構造物のなかで基礎によって削平が及ぶ範囲(調査面積496㎡:掘削面積258㎡)を中心として発掘調査を行うこととなり、平成27年6月30日に事業主との委託契約を取り交わし、7月8日から9月4日までの間、発掘調査を実施した。また平成28年9月1日から平成28年10月31日の間整理作業を実施し、平成29年度には先立って実施した1次調査と合冊にて報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

- 7月8日 重機による表土除去・遺構検出開始
- 7月9日 作業員による遺構検出および遺構掘り下げ開始

- 8月 3日 調査支援業務開始(有限会社九州文化財リサーチに委託)
 8月 29日 全体撮影実施
 9月 4日 器材撤収、現地での作業完了

(3) 調査組織

平成26～29年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄(日田市教育長; ~26年6月)
 三宮眞治郎(同教育長; 26年7月~)

調査統括 財津俊一(文化財保護課長; 26年度)、柴尾健二(同課長; 27年度)
 池田寿生(同課長; 28年度)、梶原康弘(同課長; 29年度)

調査事務 園田恭一郎(同埋蔵文化財係主幹/~27年9月)古賀信一(同主幹; 27年10月~)
 謙山温子(同主事; 26・27年度)

調査員 行時桂子(同主査)、若杉竜太(同主査・試掘担当)、長祐一郎(同主査; 28・29年度)
 上原翔平(同主任)、渡邊隆行(同主査)

来訪指導者 下村智

発掘作業員 (1次調査) 秋吉新六、蒲地妙子、合原建国美、小暮裕次、五反田静子、財津真弓、深町正博
 竹本和則、谷口なつ子、宮木博幸、森山敬一郎

(2次調査) 赤尾ミチ子、秋吉新六、井大樹、伊藤治美
 小野昭宣、河津モリ、北澤幾子、坂本由紀子、佐藤継信
 財津真弓、柴田孝彦、谷口なつ子、中馬智弘、宮木博幸
 森山敬一郎、和田征二

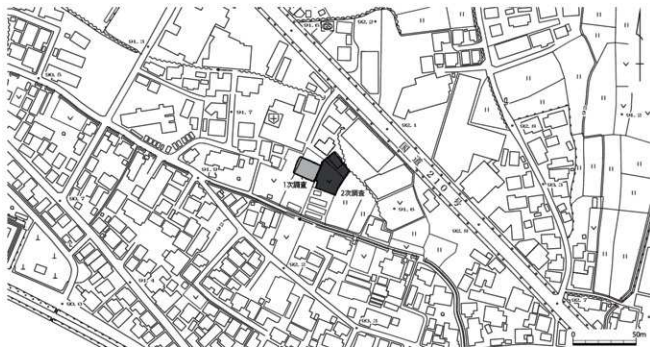
整理作業員 (1次調査) 高瀬真奈美、武石和美、田中美保、用松操
 吉田里美
 (2次調査) 高瀬真奈美、立川幸子、武石和美、田中美保
 用松操、吉田里美



写真2 2次調査発掘風景



写真3 1次調査指導風景



第1図 調査区位置図(1/3,000)



第2図 調査区配置図 (1/800)

II 遺跡の立地と環境

(1) 立地と環境

柳ノ本遺跡は、日田盆地中央部の三隈川右岸に広がる周辺との比高差が2～3mほどの沖積微高地上に位置している。宅地開発によって旧地形の詳細は不明なもの、この沖積地一帯の高い場所は最大200mほどの幅で500mほど続いており、目下のところこの微高地上に遺跡が広がっていると想定されている。

この沖積微高地は丘陵を挟んで玖珠川と大山川が合流する地点より500m程下流に位置しており、合流地点より運ばれる河川堆積物によって形成されたものと想定され、北側の丘陵との間にはやや低く後背低地が広がっている。事実この微高地は発掘調査の成果では礫と砂によって形成されていることが判明している。

この一帯の大部分は戦後までは河川流域の旧道沿いに住宅が立ち並ぶ程度で、微高地周辺は水田や畑地であった。しかし、昭和4～50年代にかけて宅地開発が進み、現在では微高地の旧地形が判然としないほど住宅が立ち並んでいる。昭和57年に偶然にも壺棺が発見されたことから遺跡の存在が周知されたものの、それ以降は調査が行われることなく、遺跡の概要は判然としないままであった。以下遺跡周辺の歴史及び遺跡について概観する。

柳ノ本遺跡ではこれまでに周辺で調査が行われた事例はなく、昭和57年の壺棺発見以外は皆無である。一方、遺跡北東側の沖積地には縄文時代後期の集落跡や中世の建物群が発見された上井手遺跡(15)があり、その背後の台地・丘陵地一帯には会所山遺跡(10)、元宮遺跡(14)、東寺原遺跡(20)、平松遺跡(18)など集落遺跡が存在する。そのほかに会所山古墳(12)、鳥羽塚古墳(13)、東寺横穴群(17)装飾古墳の法恩寺山古墳群(16)といった古墳群が広がるなど多数の古代遺跡が密集し、さらに盆地中心部の日田条里遺跡(7)、大波羅遺跡(8)、会所宮遺跡(9)といった多数の遺跡が展開する。この一帯は豊後国風土記に記される古代

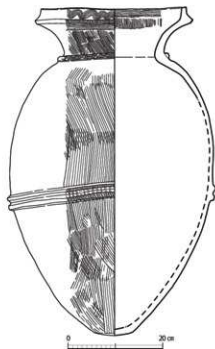
日田郡を治めた日下部氏の祖先の呂阿自の本拠地とされる日田郡5郷の一つ、刈連郷に該当すると考えられている。また、西側の三隈川右岸には弥生時代の包含層や古墳時代後期の竪穴建物などが発見された入籠遺跡(6)のほか、獣帯鏡が出土した日隈古墳(4)や中世建物群がある村前遺跡(2)などの遺跡があるが、なかでも城下町の隈町(5)と日隈城(4)は近世日田の基礎となった遺跡で、いまでも寺社群が総構えの城下の外に残るなど当時の堅牢な造りが見て取れる。一方、三隈川を挟んだ対岸の台地上には弥生集落や古代集落が発見された上野遺跡(21)、古墳時代の集落跡の陣ヶ原遺跡(25)、古墳から中世の集落跡の高瀬条里(23)や惣田遺跡(27)、大宮遺跡(29)大部遺跡(30)などとともに姫塚古墳(24)、惣田塚古墳は(8)などの墳墓も展開している。

このように、遺跡周辺には古代から近世にかけての遺跡が三隈川両岸に展開しており、さらに、近世においては、遺跡南西の河川沿いには筑後川通船の港湾となる竹田河岸が作られているなど、三隈川を取り囲む河川交通網の中心的な場所であったと推察される。

(2) 昭和57年発見の壺について

日田市史によれば、本調査地の土地所有者である小野清美氏が昭和57年に畑作中に発見したものである。発見場所の詳細は不明であるものの、1次調査地から南側で見つかったと所有者から聞き取っている。壺は器高69cm、胴部最大径43.7cmと中型の二重口縁壺で、口縁部は短く立ち上り外反し、胴部は砲弾状を呈し、底部はレンズ底を呈する。頭部には網目状の刻みを施した1条の突帯、胴部には斜めに刻み目が施された逆断面台形状の突帯が2重に巡る。口縁部頭部と腹口縁端部に刻目が施され、腹口縁外面には5条の櫛書波状文様が巡る。内外共にハケ目が残るものの比較的丁寧な仕上げで胎土も精良である。同様の器形の壺は後迫遺跡1次7号甕棺、14号甕棺や佐寺原遺跡3次2号住出土壺などの例があり、波状文については、小迫辻原遺跡B区5号住、C区7号住などの出土例がある。こうしたことから、この甕は在地製作の甕ではあるものの豊後系の文様意匠を取り入れたものと言え、形態から波遺Vb~Ia前後に該当するものと想定しておきたい。

〔参考文献〕『日田市史』日田市 1990 ほかに日田市教育委員会発行の関係遺跡報告書など



第3図 昭和57年発見の壺(1/8)



第4図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

Ⅲ 1次調査の記録

(1) 調査の概要 (第 3-1 図、写真図版 1)

調査対象地は畑地として利用され、一部には樹木が植わっていたことから、部分的に削平を受けている状況であった。予備調査では現地表面からの深さ約 40～50 cm で弥生～古墳時代と考えられる石棺墓や土坑などが確認されているものの、砂礫層と砂層が入り混じった地形を呈していることから、建物予定地のうち遺構の所在する可能性の高い範囲 254 m² を調査対象とした。

調査は調査区東側から重機により表土除去を行った。予備調査結果どおり、耕作土直下の深さ 40 cm 程度で淡黄褐色土の地山が検出され (第 5 図)、この層を地山面と判断した。直下より甕棺墓や石棺と思われる石材が次々と確認される一方で調査区の南西側は砂礫が多く混じる地山で北西から南東側に墓列の多くが集中していることが明らかとなった。最終的には甕棺墓 4 基、石棺墓 9 基、土坑墓 4 基の計 17 基の墳墓群が北西から南東に列状に集中し、また墓群からやや離れた東側には竪穴建物や掘立柱建物などの生活遺構が検出され、墓群のすぐ傍に集落に広がっているものと考えられた。

以下、検出された遺構および出土遺物の説明を行う。なお、遺物の時期比定には V に提示した時期比定参考文献を利用し、該当型式は著者名等を付して解説するものとする。

(2) 遺構と遺物 (第 6～16 図)

甕棺墓 (第 6～8 図、写真図版 2)

3・6・13・15 号墓が該当する。このうち 13・15 号墓は大型成人用甕棺墓、3・6 号墓は小児用甕棺墓である。成人用甕棺墓は調査区南東側に集中しており、小児用甕棺墓 2 基については 2・8 号石棺墓にそれぞれ隣接して営まれていた。13 号甕棺が単棺でそれ以外はいずれも合口であった。

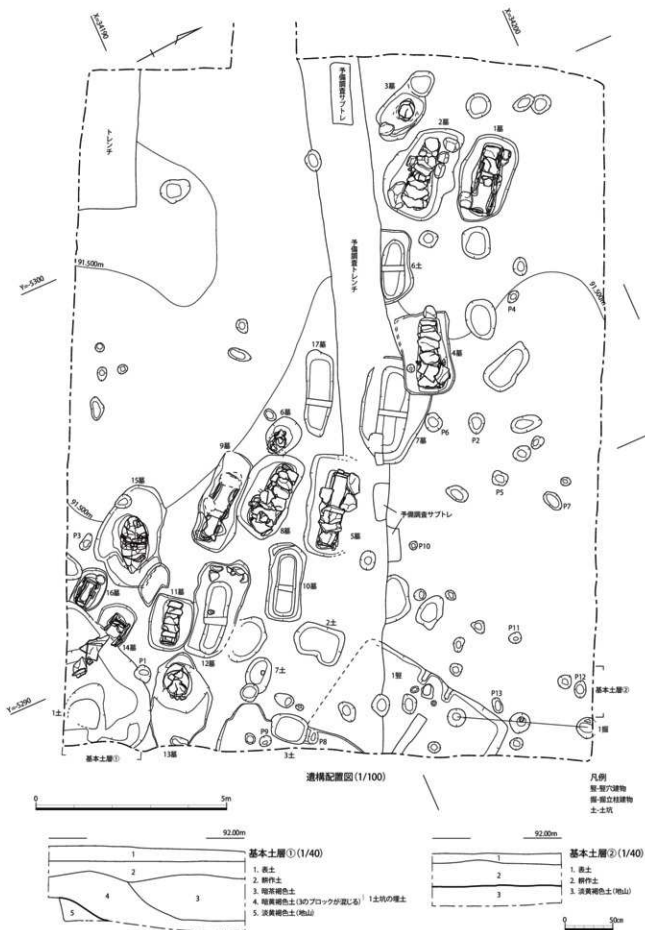
3 号墓 (第 6 図) は調査区北西の墓列端にあたる 2 号石棺墓に隣接する小児用甕棺墓である。上面が大幅に削平を受けており、下襲については一部のみが残存している状態であった。また遺構掘下げ時にテラス面については誤って掘り過ぎている。墓坑長軸約 1.1 m、短軸約 1 m、深さは約 45 cm を測り、南側の巨礫を避けるように墳墓を設置したものと考えられる。埋置角度は 50° 前後、主軸は 139° を測り、主体部は合口の甕棺墓と考えられる。人骨等の出土は見られなかったが、内部には赤色顔料が塗布されていた。

1 は上襲で、口縁部のみが残存している状態である。内外面はハケが残る。2 は下襲である。口縁部がくの字に外反し、頸部に断面逆台形の突帯が巡る。肩部が張り出した砲弾状の器形で胴部やや下半に 1 条の断面三角形の突帯が巡る。底部はややレンズ気味の平底を呈する。外面は幅の大きなハケが残り、内面はナデ調整で一部指圧痕が残る。渡邉後期 V a 期 (西新町) に相当するものか。

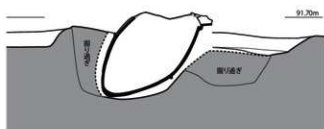
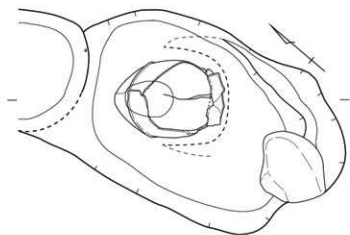
6 号墓 (第 6 図) は調査区中央の 8 号石棺墓に隣接する小児用甕棺墓である。上面が大幅に削平を受けており、下襲は割れて下襲に埋没した状態で検出された。墓坑長軸約 1 m、短軸約 0.8 m、深さは約 50 cm を測り、幅 30 cm 程のテラスを設けて下襲を埋置する。埋置角度は 40° 前後、主軸は 334° を測り、主体部は合口の甕棺墓と考えられ、合口部には間詰粘土が巡る。人骨等の出土は見られなかったが、下襲内部には赤色顔料が大量に沈殿しており、テラス部一面にも赤色顔料が大量に塗布されていた。

1 は上襲で、打ち欠き口縁で、砲弾状の器形で底部はレンズ状を呈する。内外面は細かなハケ目が残る。2 は下襲である。口縁部がゆるやかに外反し、頸部に断面逆台形の突帯が巡る。卵型の器形で底部はレンズ底を呈する。内外面に細かなハケ目が残る。底部がまだしっかりしたレンズ底であることから、渡邉後期 V b 期 (西新町) でも古相のものか。

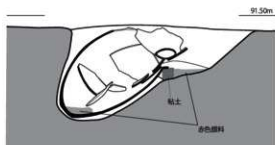
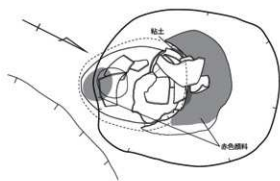
13 号墓 (第 7 図、第 16 図 1) は調査区南西端の 1 号土坑に切られる成人用甕棺墓である。上面が大幅に削平



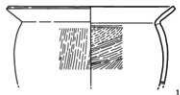
第5図 1次調査区全体図 (1/100、1/40)



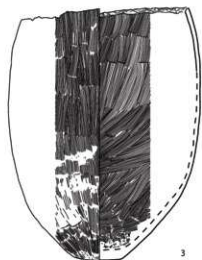
3号墓



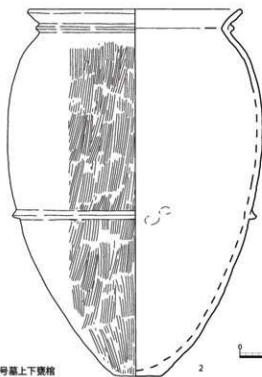
6号墓



1

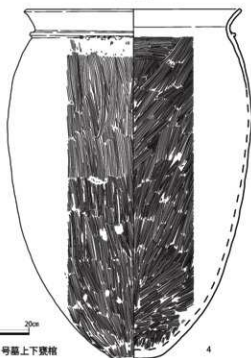


3



3号墓上下葬棺

2

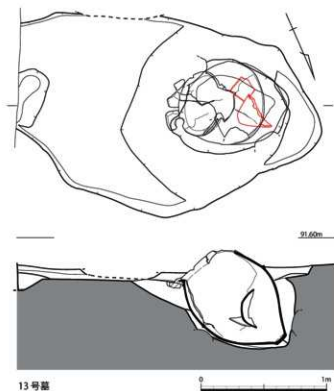


6号墓上下葬棺

4



第6图 3·6号墓、出土葬棺尖测图 (1/20、1/6)



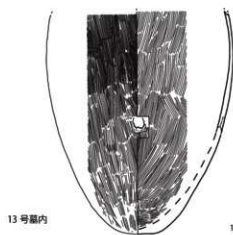
13号墓

第7図 13号墓、出土襃棺実測図（1/30、1/8）

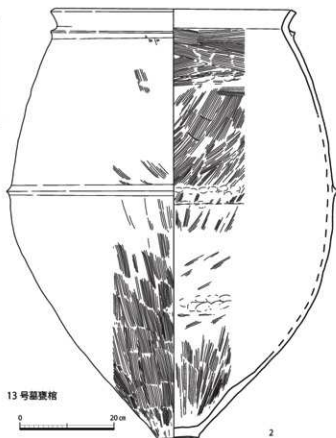
を受けた状態で、墓坑長軸約 2.4 m、短軸約 1.6 m、深さは約 80cm を測り、襃棺胴位付近まで揺るやかに掘下げ段をつけて埋置する。口縁部付近には襃を安定させるため、小礫を下部にすえており、地山には巨礫が見えるなど、隙間を縫って襃棺を置いている。埋置角度は 43° 前後、主軸は 296° を測り、主体部は単棺の襃棺墓と考えられるが目貼り粘土等の痕跡は確認できなかった。

人骨等の出土は見られなかったが、襃内部には蓋部破損に伴い混入した泥とともに胴部から底部にかけての襃が混入していた。この襃は口縁部が欠損しているが、サイズが主棺の口径と明らかに異なっており、また明らかに新しいプロポーシオンで胴部下半に穿孔が施されている。このことから、この襃については当襃棺墓の上襃となるものではなく、おそらく周囲に所在した新しい時期の小児用襃棺墓の下襃等を 13 号墓の開口時に投げ入れたものと想定しておきたい。そのため、埋土中には弥生土器高坏胴部（第 16 図 1）も混入していた。

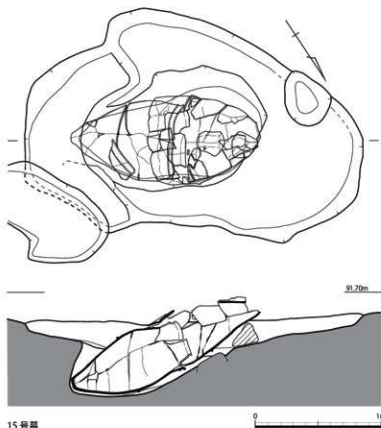
1 は内部混入していた小児棺で、口縁部を欠損している。砲弾状の器形で底部は丸底気味のレンズ底を呈する。内外面は細かなハケ目仕上げで、胴部下半部に水抜き穿孔が見られる。2 は襃棺である。口縁部がくの字に小さく外反し、頸部に断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや張りだし、段面三角形の突帯が巡り、底部はややシャープに窄まり上げ底気味の平底である。内外面に細かなハケ目が残り、胴部下半には指圧痕、胴部中部には突帯貼付時の指圧痕と接合痕が見られる。1 は丸底気味のレンズ底であることから渡邊後期 V b 期（西新町）と考え



13号墓内



13号墓襃棺



15号墓

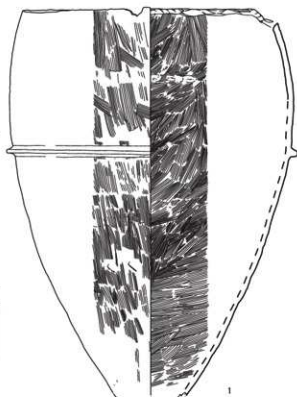
第8図 15号墓、出土甕棺実測図(1/30、1/8)

たい。2は底部がしっかりした平底で口縁部が立ち上がり気味である。市内では同型の甕棺の出土は初例で、橋口編年KIV b～cの三津永田式に該当するとしても底部形態からはかなり古い時期と見ておきたい。そこで、これまで事例のなかった渡邉後期2期（高三瀬新段階）の甕棺と位置けておきたい。

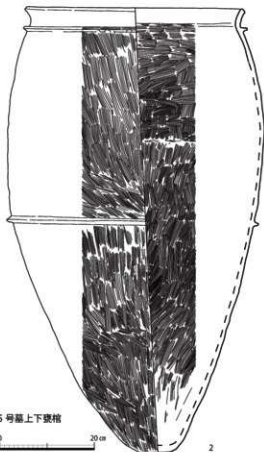
15号墓（第8図）は調査区南西端の11・16号墓に隣接する成人用甕棺墓で上面が大幅に削平を受けていた。墓坑長軸約2.7m、短軸約1.7m、深さは約75cmを測り、幅85cmほどのテラス部から掘り下げて下甕を挿入する。上甕底部付近には甕を安定させるためか礫が安置されていた。埋置角度は 22° 前後、主軸は 304° を測り、合口の甕棺墓だが目貼り粘土等の痕跡は確認できず、人骨等の出土は見られなかった。

1は上甕で、打欠き口縁で、砲弾状の器形の胴部下半に断面逆台形の突帯が巡る。底部は欠損しているが、プロポーシオンが下甕に類似することから同様の底部形態を想定したい。2は下甕である。口縁部がくの字に小さく外反し、頸部に断面三角形の突帯が巡る。長く伸びる胴部下半に段面三角形の突帯が巡り、底部は丸底気味のレンズ底を呈する。内外面に細かなハケ目が残る。

1、2とも長く伸びる甕の形態で底部が丸底気味のレンズ底を呈していることから、渡邉後期V bの甕棺と



1



15号墓上下甕棺

2

位置付けておきたい。

箱式石棺墓（第9～11図、写真図版3～5）

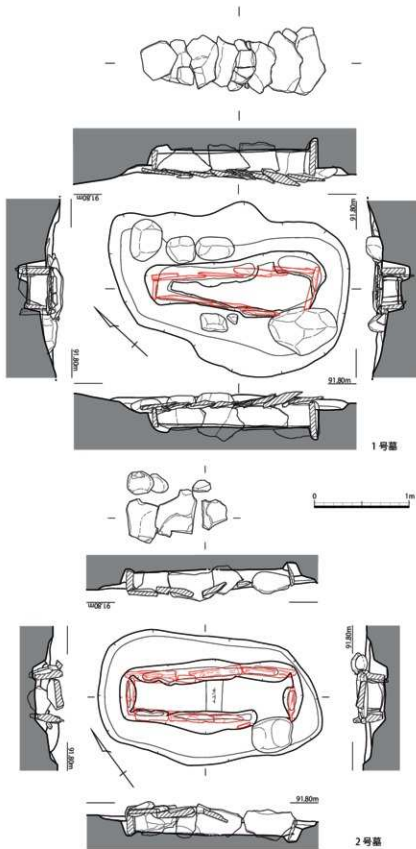
1・2・4・5・8・9・11・14・16号墓が該当する。いずれも2段掘りの墓坑を呈し、主体部床面は地山成形であった。このうち、1・2号墓では除去が困難と想定される地山の巨礫を一部利用して石棺墓を組み立てており、

8号墓は使用している側壁や蓋石の多くに川原石が用いられているなど、沓瀬原ならではの石棺造営の特徴が見られた。また、11号墓からはガラス小玉が1点出土しており、1号土抗で発見されたガラス小玉は14号墓の副葬品であるものと想定されるなど、副葬遺物の出土も見られる点が特徴的である。

1号墓（第9図）は調査区北西端の2号墓に並列する石棺墓で、鍔重ねの蓋石がほぼ残存していた。主体部は板石で仕上げられるが南西側の左頭位側は地山自然石をそのまま利用して構築していた。また北東側の右足側には大型の自然石が残り、そのせいか足部の幅がかなり狭まっていた。人骨の残存は見られず、遺物の出土もなかった。

2号墓（第9図、第16図1）は調査区北西端の1号墓に並列する石棺墓で、鍔重ねの蓋石がほぼ残存していた。主体部は板石で仕上げられるが南西側の左頭位側は地山自然石をそのまま利用して構築していた。また北東側の右足側には大型の自然石が残り、そのせいか足部の幅がかなり狭まっていた。人骨の残存は見られず、遺物は弥生土器高坏の破片が埋土より出土した。

4号墓（第10図、第16図3～5）は調査区中央部で7号墓を切る石棺墓で、鍔重ねの蓋石がほぼ残存していた。主体部は板石で仕上げられ、北西側の右足側には大型の自然石を残したままとしていた。人骨の残存は見られないものの、蓋石の上部付近から7世紀末～8世紀代の須恵器坏身の破片が出土した。明らか



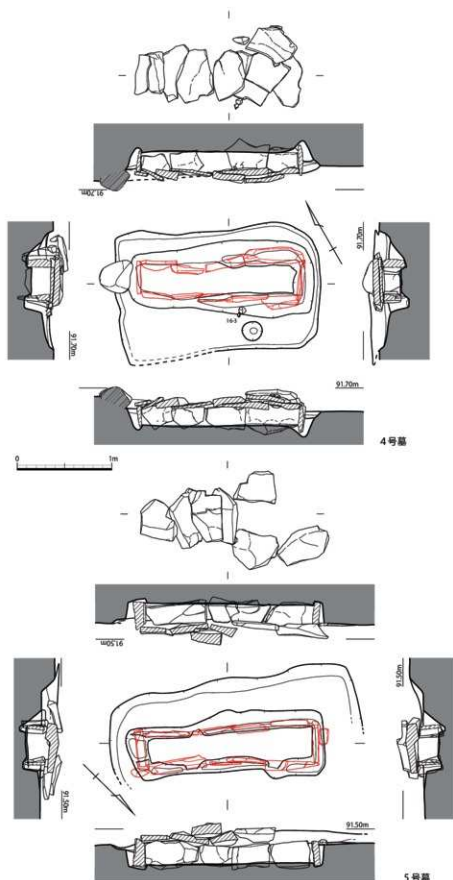
第9図 1・2号墓尖測図 (1/40)

に新しい時代の遺物で、蓋石上部の出土であることから後世の攪乱層や別遺構が上部にあったものと考えておきたい。そのほか埋土中から弥生土器と土師器裏の口縁部の破片が出土している。

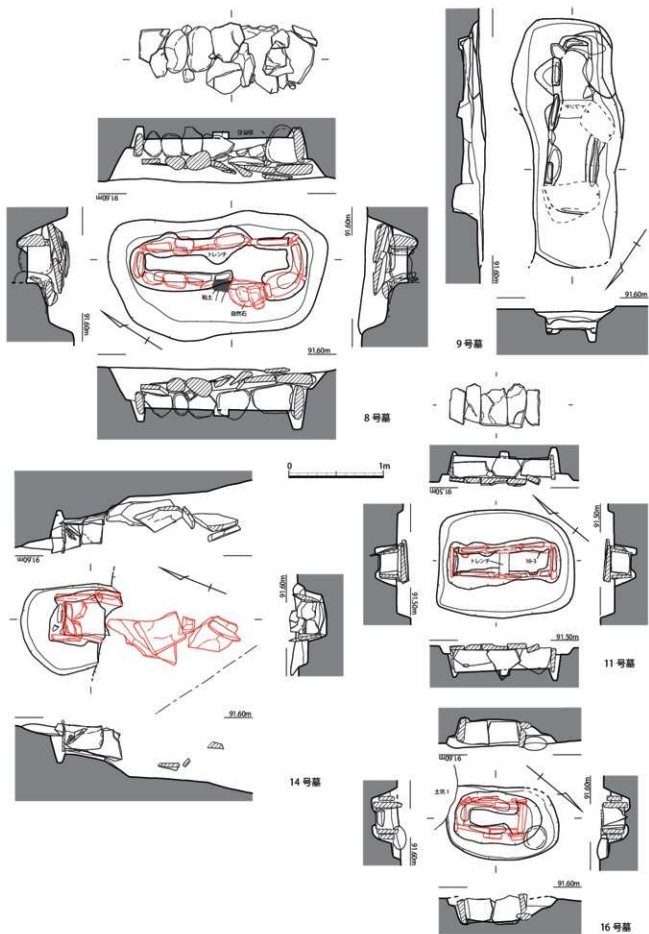
5号墓(第10図)は調査区中央部で8号墓に並列する石棺墓である。予備調査時に発見されていた石棺墓でその際に北東側の掘方をなくしている。甕重ねの蓋石は北東側のみが残存していた。主体部は板石で仕上げられ、人骨の残存や土器の出土は見られなかった。

8号墓(第11図、第16図6)は調査区中央部で5号墓に並列し、9号墓を切る石棺墓である。甕重ねの蓋石がほぼ残存していたが、蓋石の一部に河原石が利用され、主体部は右側壁側に数枚割石が用いられる以外は自然の河原石の中でも比較的平たい石が利用されていた。さらに左頭位付近では地山に含まれる自然石を側壁として利用し、不足する高さを河原石と扁平石を積み重ねて目貼り粘土を施していた。人骨の残存はなく、弥生土器口縁破片が埋土中に見られた。

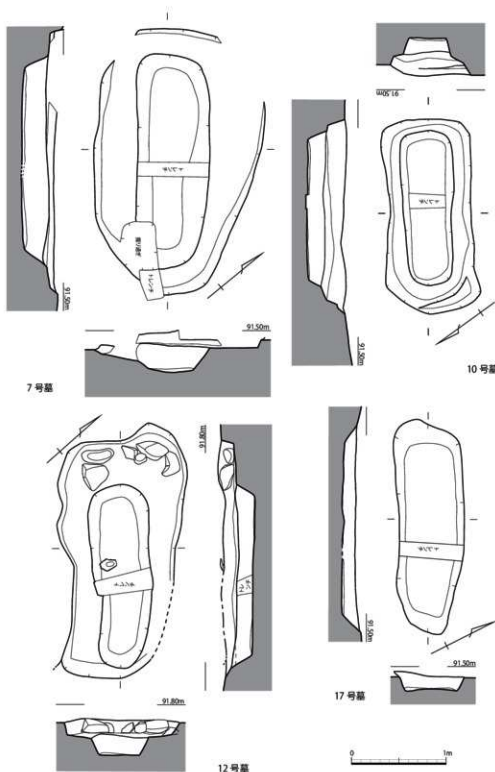
9号墓(第11図、第16図11)は調査区中央部で8号墓に切られる石棺墓である。削平が著しく、板石は全く残存していなかったが、側壁抜き取り痕が顕著に確認されたことから箱式石棺墓と判断した。人骨の残存は見られず、弥生土器鉢の底部が出土した。



第10図 4・5号墓実測図(1/40)



第11图 8·9·11·14·16号墓实测图 (1/40)



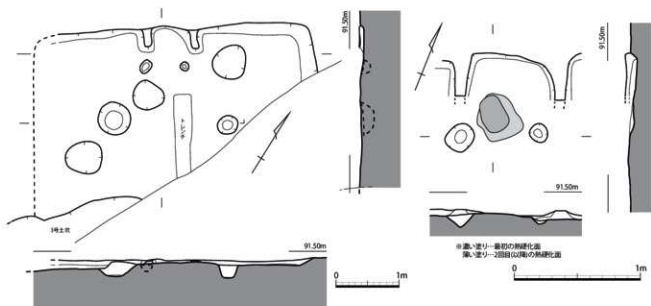
第12図 7・10・12・17号墓実測図 (1/40)

11号墓（第11図）は調査区南東端12号墓を切る小児用石棺墓である。蓋重ねの蓋石はほぼ残存しており、主体部は板石で仕上げられていた。人骨の残存は見られないものの、右頭位付近にガラス小玉が副葬されていた。そのほか弥生土器の甕の破片が埋土中より出土した。

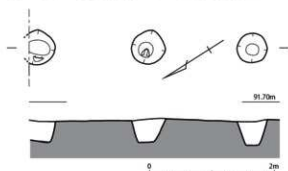
土坑墓（第12図、写真版5）

7・10・12・17号墓が該当する。2段掘りの墓坑をもつものが大半である。多くが石棺墓に並列することなどから土坑墓と判断した。

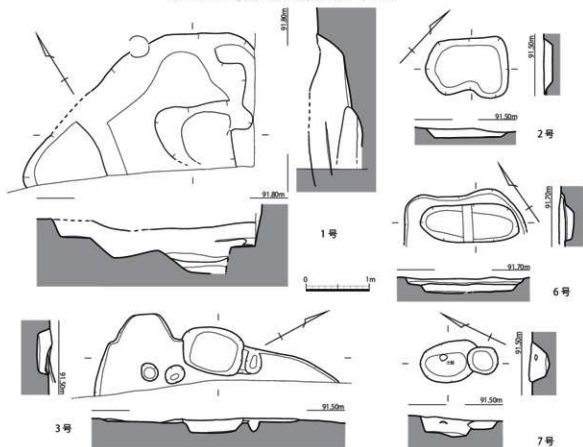
14号墓（第11図）は調査区南端の1号土坑に切られる石棺墓である。1号土坑によって主体部の大半が削平を受けており、石棺墓の北位側壁一枚分のみが残存しそれ以外は滅失していた。土坑側に板石が手前に引き倒されるように流入していた。人骨の残存や土器の出土は見られなかったが、1号土坑からはガラス小玉が出土しており、この石棺に伴う可能性が考えられる。



第13図 1号竪穴建物・カマド実測図 (1/60・1/30)



第14図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第15図 土坑実測図 (1/60)

7号墓(第12図、第16図7～10)は4号墓に切られる土坑墓で予備調査のトレンチにより南半を失っていた。埋土からは弥生時代後期の甕等の破片が出土した。

10号墓(第12図、第16図14～16)は12号墓に隣接する。遺物の出土は見られなかった。

12号墓(第12図)は11号墓を切られ、頭付近の掘方部に川原石が固まって埋められていた。埋土中からは後期の甕や刻目突帯が巡る胴部破片などが出土した。

17号墓(第12図)は7号墓に並列する土坑墓である。長方形の形状から墳墓主体部と判断したが、墳墓でない可能性もある。遺物の出土はなかった。

竪穴建物(第13図、16図17・18)

1号竪穴建物は調査区東端に位置し、上半がほぼ削平を受け西側の壁はなくなっており、3号土坑に切られる。南北約4.4m、東西2.8m+ α 、深さは約10cmである。カマドは北側に敷設され、主柱穴の可能性のあるピットが調査区中央部北側に2つ見られたがいずれも浅く、無柱建物の可能性がある。

カマドは袖石抜き痕跡が見られ、その中央より壁側に火床面が見られ、複数回にわたる硬化が確認される。袖石の痕跡から幅約70cm、奥行き約70cmを測る。

出土遺物(第16図17・18)はカマド付近より須恵器坏蓋、手捏土器などの小破片が見られ、須恵器坏蓋より7世紀第2四半程度の時期と想定しておきたい。

掘立柱建物(第14図、第16図19・20)

1号掘立柱建物は調査区北東端で確認された柱穴3個で、1号竪穴建物を切っており、調査区外に展開するものと想定される。柱穴間の距離は約1.7mで中央の柱穴の底には小礫が見られた。

出土遺物(第16図19・20)は土師器の椀などが見られた。8世紀代であろうか。

土坑(第15図、第16図)

調査区内の各所に見られるが、ここでは遺物が出土し、しっかりと掘りこまれた遺構のみを報告する。このうち6号土坑は小型の墳墓の可能性もあったが、深さがかなり浅いことからここでは土坑として報告する。

1号土坑(第15図)は調査区南端に位置し、13・14号墓を切っている。東西3.6m+ α 、南北2.2m+ α の不定形を呈し、段々状に中央部に向かって深くなり、最深部の深さは80cmを測る。土層観察(第5図)では自然堆積ではなくブロック混じりの一括堆積埋土であった。

出土遺物(第16図22～37)は弥生後期前半から後半代の甕や高坏などが主で、一部青色のガラス小玉も出土しており、14号墓の副葬品の可能性がある。出土遺物はやや古いものの、14号墓を破壊して掘り込まれていることから、埋葬意識が落ち着いた古墳時代以降の時期のものとして想定しておきたい。

2号土坑(第15図)は墓群に近接する土坑で、長軸1.3m、短軸1m、深さ約10cmで、遺物の出土は見られなかった。

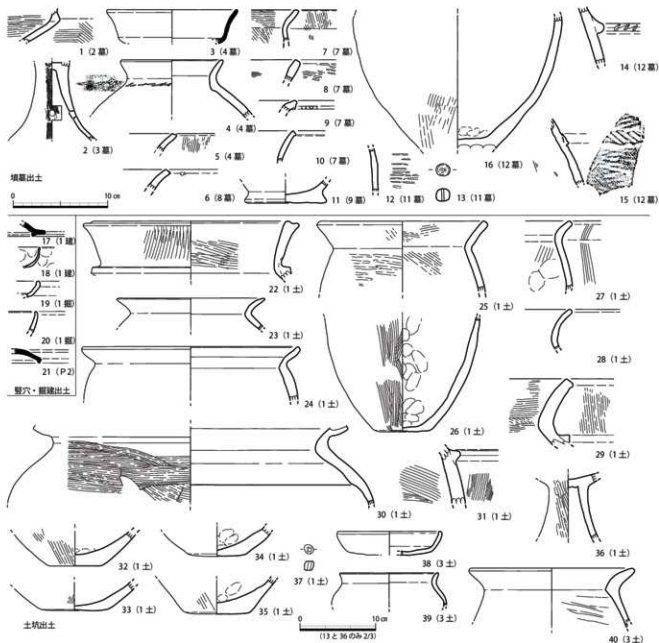
3号土坑(第15、16図)は1号竪穴建物を切っており、方形状を呈するものと想定される。長軸3.8m+ α 、短軸1.2m+ α 、深さは深いところで20cmを測り、北東側に一段深い堀込が見られる。

出土遺物(第16図38・40)は土師器椀や甕が見られる8世紀前半代の所産か。

6号土坑(第15図)は調査区北西側の2・4号墓に挟まれる位置にあり、当初墳墓と想定していたが、主体となる堀込が極端に浅いことから土坑として報告する。2段堀形状で、長軸1.9m、短軸0.9mを測り、深さ1段目10cm、2段目15cmと極端に浅い。

7号土坑(第15、16図)は3号土坑に近接する円形状の土坑でピットに切られる。長軸80cm、短軸70cmで深さは約30cmである。

出土遺物(第16図39)は土師器小型壺が見られた。



第16図 1次調査出土遺物実測図 (1/4、2/3)

その他の遺構 (第5、16図21)

調査区内からは多数のピットが出土しており、主に調査区北東側に固まっていた。それらのピット (P1～13) からは土器の破片 (未掲載) が出土し、このうち P2 からは須恵器蓋片 (第16図21) が出土した。口縁短部が下方に折れ曲がっており、8世紀初頭頃のもの と推測される。

第1表 1次調査墳墓計測表

図号	遺構番号	種類	測位内	墓室			主体部			出土物
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	
5	3号墓	竈形	139	108	100	10	-	-	-	
6	6号墓	竈形	333	98	82	26	-	-	-	
7	13号墓	竈形	296	216	162	7	-	-	-	
8	15号墓	竈形	304	269	168	15	-	-	-	
9	1号墓	石棺	137	255	164	10	172	43	25	
9	2号墓	石棺	126	236	142	5	163	45	20	
10	4号墓	石棺	119	218	133	15	165	35	20	
10	5号墓	石棺	216	265	121 ± a	14	178	38	25	
11	8号墓	石棺	147	232	139	16	160	38	30	
11	9号墓	石棺	326	264	116	7	144 ± a	39	7	
11	11号墓	石棺	140	143	114	15	103	21	22	ガラス小玉
11	14号墓	石棺	159	-	-	10	-	-	31	ガラス小玉
11	16号墓	石棺	321	115	179	10	55	22	25	
12	7号墓	土坑	309	280	-	179	15	191	51.6	28
12	10号墓	土坑	128	206	95	26.9	149	40	1.8	
12	12号墓	土坑	311	269	137	18	166	40	20	
12	17号墓	土坑	296	-	-	-	184	53.2	17	



第17图 2次調査区全体图 (1/150)

IV 2次調査の記録

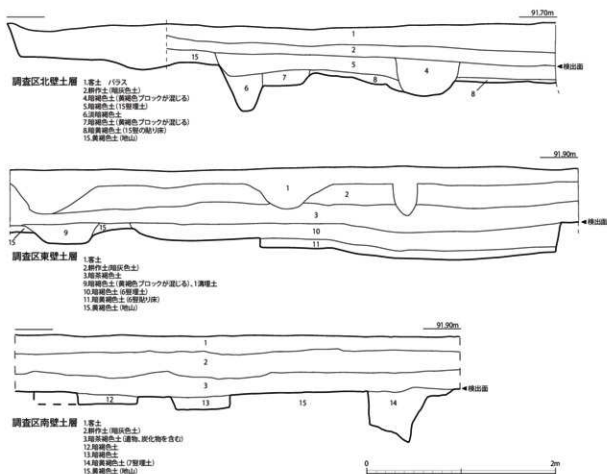
(1) 調査の概要 (第17図)

調査地は1次調査の東側に隣接することから、墓群の続きが発見されることが予想された。予備調査では、現地表面からの深さ約30～70cmで弥生から古墳時代と考えられる竪穴建物や土坑、墳墓などの遺構が確認され、建物予定地のうち、基礎によって遺跡の破壊される範囲を本調査の対象とした。

調査は調査区南側から重機により表土除去を行った。予備調査の結果通り、深さ約60cmで黄褐色土(15層)の自然堆積層(地山)を確認し、この地層から土坑墓や竪穴建物が出たことから、この層を遺構検出面と判断した。遺構検出面までは、客土(1層)と耕作土(2層)の下に古代以降の遺物包含層と考えられる暗茶褐色土(3層)が堆積していた。しかし、北壁土層から3層は確認されず、耕作土(2層)の直下に地山を確認している。地山を掘り込む遺構は、暗褐色土(4・5・7・9層)や暗黄褐色土(14層)など異なる埋土を持っており、複数の時代の遺構が重複している可能性が考えられた。南・東壁で見られる3層は遺跡廃絶後の古代以降に調査区南側に堆積した包含層と想定しておきたい。なお、2次調査の地山は1次調査と異なり、砂礫等がほとんど確認されず、比較的良好な地盤であった。(第18図)

調査では石棺墓2基、石蓋土坑墓2基、土坑墓2基、小児用襖棺墓1基、竪穴建物19軒、土坑3基、ピット多数を検出した。墓群は調査区西側に集中しており、東側には竪穴建物などの生活遺構が密集して広がっている。

以下、検出された遺構および出土遺物の説明を行う。なお、遺物の時期比定にはVに提示した時期比定参考文献を利用し、該当型式は著者名等を付して解説するものとする。

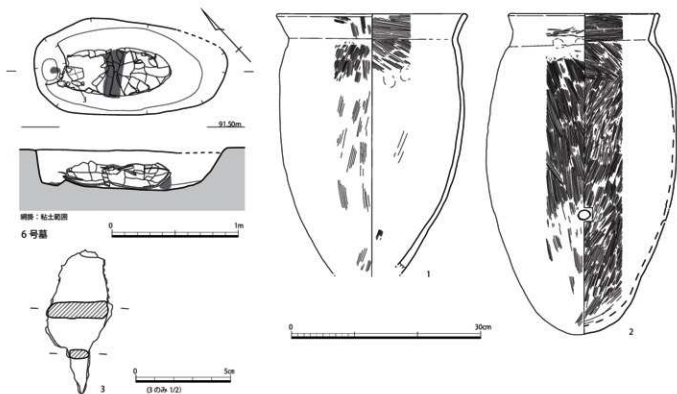


第18図 2次調査区土層断面図 (1/40)

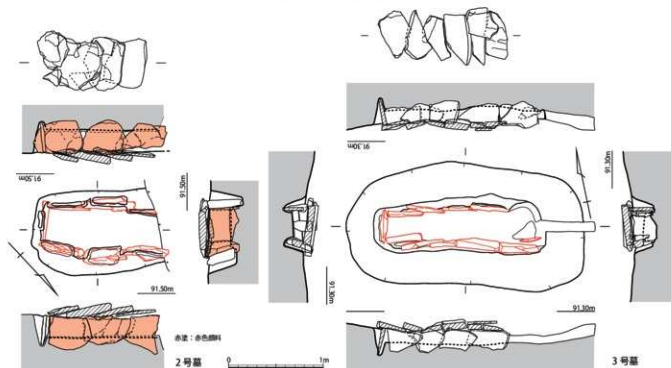
(2) 遺構と遺物 (第19～32図)

襖棺墓 (第19図、写真図版10)

6号墓 (第19図) は調査区南側に位置し、1号土坑墓を切る小児用襖棺墓である。土圧の影響で上襖・下襖とも潰れた状態で検出された。墓壇長軸 1.5m、短軸 0.75m、深さ約 30cm、主軸は 225° を測る。主体部は合口の襖棺墓ではほぼ水平に埋納されており、合口部には目貼り粘土が施されている。上下襖の底部付近にもレベル調



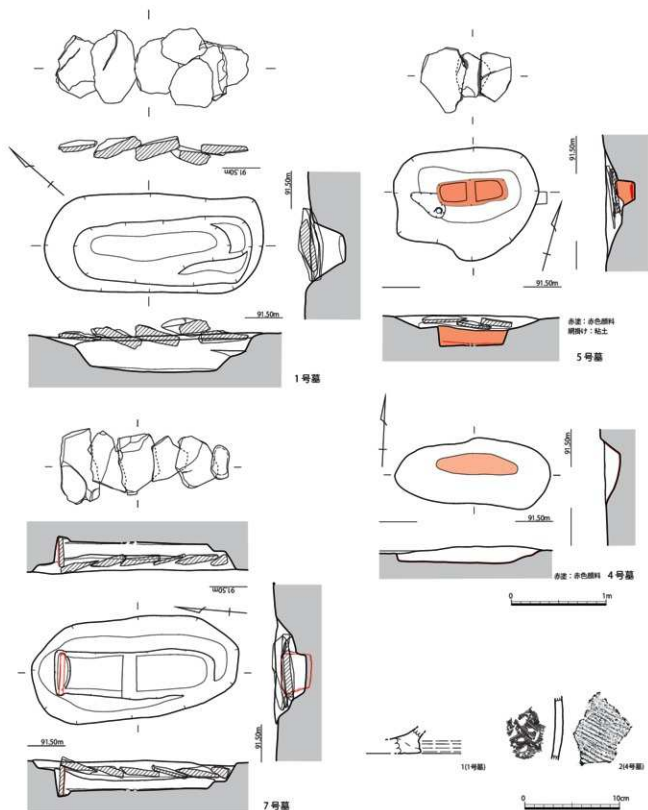
第19図 6号墓、出土襖棺・遺物実測図 (1/30、1/6、1/2)



第20図 2・3号石棺墓実測図 (1/40)

整の為であろうか、粘土が見られた。内部に人骨等の出土は見られなかったが、上裏から鉄鏡が1点出土した。

1は上裏で口縁部は緩やかに外反し、胴部は張らず長胴形を呈する。内外面はハケ目が残る。2は下裏で口縁部はほぼ直行に立ち上がる。砲弾状の器形で底部は丸底である。内外面共に丁寧なハケが施され、胴部下半部には水抜き穿孔が施される。3は上裏から出土した有茎式鉄鏡である。裏の砲弾状の器形と底部が丸底である事などから、古墳時代前期前半、波遺I b頃と想定される。



第21図 1・4・5・7号土坑墓、墳墓出土遺物実測図(1/40、1/4)

石棺墓（第20図、写真図版9）

2号墓、3号墓が該当する。いずれも成人用石棺墓と考えられ、1次調査で確認された墓群の続きと考えられる。主体部の床面は地山成形であった。

2号墓（第20図）は、調査区南側に位置し、1号土坑墓や6号甕棺墓に並列し、一部が調査区外にかかっている。鍔重ねの蓋石が残り、主体部は板石で仕上げられる。後世の削平の為か、墓域は確認されず、主体部のみ残存していた。出土遺物などは発見されなかったが、主体部板石内面全体に赤色顔料が施されていた。

3号墓（第20図）は、調査区中央やや西側に位置し、4・5号墓に隣接する。墓群とは離れた位置で検出され主軸も異なっている。鍔重ねの蓋石がほぼ残っており、主体部は板石で仕上げられる。

出土遺物は確認されなかった。

石蓋土坑墓（第21図、写真図版9・10）

1号墓、5号墓、7号墓が該当する。1・7号墓は成人用で5号墓は小児用と考えられる。いずれも2段堀りの墓域を持ち、主体部は地山成形で、残存する蓋石が主体部直上の上になっていることなどから石蓋土坑墓と判断した。

1号墓（第21図）は調査区南側に位置し、2号墓の南側、6号墓に切られる。鍔重ねの蓋石が残る。

出土遺物（第21図1）は主体部から弥生土器の底部片が見られる。

5号墓（第21図）は調査区中央よりやや西側に位置し、3・4号墓に隣接する。鍔重ねの蓋石が残る。蓋石の間には目貼り粘土が施されていた。

出土遺物は確認されなかったが、主体部には全面に赤色顔料が施されていた。

7号墓（第21図）は調査区北側の他の墓群からかなり離れた場所に位置し、鍔重ねの蓋石が残る。主体部には北側小口部分にのみ板石が配してあり、石棺が簡略化されたものと想定される。

出土遺物は確認されなかった。

土坑墓（第21図、写真図版9）

4号墓（第21図）は調査区中央やや西側に位置し、3・5号墓に隣接する。成人用の土坑墓と想定される。地山成形の浅い主体部の為、土坑の可能性もあるが、石棺墓に並列しており、全体に赤色顔料が施されていた事から土坑墓と判断した。

出土遺物（第21図2）は主体部から弥生土器の胴部片が見られる。

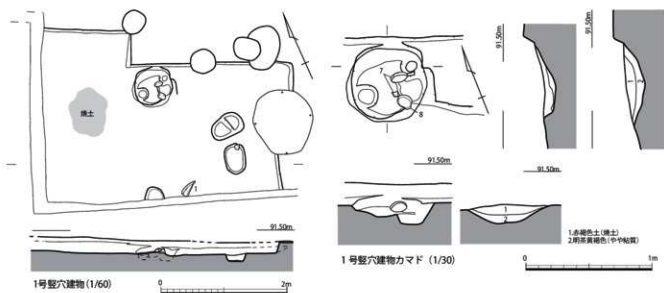
竪穴建物（第22図、写真図版11）

調査区全体で19軒を確認した。調査区の東側に多く、墳墓群とは切り合いが見られない。（第22～24図）

1号竪穴建物（第22図、写真図版10）は調査区南側に位置する。南・西側の一部が調査区外に延びる。規模は南北約2.7m+α、東西約3.7m+α、深さ約20cmで北側にカマドが敷設され、北西に張り出しを持つ。主柱穴と考えられるピットは確認されなかったことから無柱穴の建物であった可能性がある。平面形状は方形と想定される。

出土遺物（第25図1～11）は、須恵器蓋・環や甕、土師器環、甕が見られる。須恵器蓋の口縁端部の返りが見られない点や、環の口縁部が外反しながら立ち上がることなどから中村IV・II期頃の8世紀前半頃と想定しておきたい。

2号竪穴建物（第22図、写真図版10）は、調査区中央やや南に位置し、3・4号竪穴建物を切っている。規模は南北約4.6m、東西約5.0m、深さ約15cmで平面形状はほぼ方形を呈する。また、南壁中央付近にある土坑は、屋内土坑と考えられる。



第22図 1~5・7・10号竪穴建物実測図 (1/80、1/60、1/30)

出土遺物（第25図12～19）は、土師器壺、弥生土器甕、壺や台付きの鉢などが複数の時期にまたがって遺物が見られる。14・15など弥生土器が出土しているが、隣接している4号建物の埋没過程での混入と考えられる。口縁部が外反して立ち上がり、胴部が張りだし底部が球形を呈する土師器甕や複合口縁部がほぼ直行に立ち上がる土師器壺などから重藤Ⅱ期頃の古墳時代前期頃と捉えておきたい。

3号竪穴建物（第22図、写真図版10）は、調査区中央やや南に位置し、2号竪穴建物に切られる。規模は南北約4.5m、東西3.2m、深さ約25cmで平面形状は長方形を呈する。

出土遺物（第25図20～22）は、土師器壺、砥石などが見られる。口径が胴部を上回る土師器壺などが出土しており、2号竪穴建物に切られているものの、ほぼ同時期の古墳時代前期と想定しておきたい。

4号竪穴建物（第22図）は、調査区中央やや南に位置する。上面を削平されており、遺物の集中部のみ埋土が残っていた。本来の平面形状は円形と考えられるが、周囲に他の遺構が密集しているため、主柱穴や本来の規模は不明である。

出土遺物（第26図）は、跳ね上げ口縁を呈する弥生土器甕・壺のほか、砥石が見られることから、渡邊中期7期の弥生時代中期後半頃と想定している。なお、1の須恵器は10号建物の埋没過程での混入によるものと考えられる。

5号竪穴建物（第22図）は、調査区南東隅に位置し、東側約半分が調査区外である。規模は南北約6.6m、東西3.0m+ α 、深さ約20cmで北側に張り出しを有する。平面形状は長方形と想定される。

出土遺物（第27図1～5）は口縁端部に刻み目を持ち、頸部に刻み目突帯が巡る弥生土器甕などが見られる事から、渡邊後期4～5期頃の弥生時代後期後半頃と考えておきたい。1の須恵器環は周囲の遺構から、2の弥生土器甕は4号竪穴建物からの混入と判断される。

6号竪穴建物（第24図）は、調査区西端に位置し、8号竪穴建物を切り、14号竪穴建物に切られる。東側約半分が調査区外である。規模は、南北約6.2m、東西約2.0m+ α 、深さ約20cmで平面形状は方形を呈すると考えられる。

出土遺物（第27図6～10）は、口縁部が上方に立ち上がり、長胴気味の弥生土器甕などが見られる事から、渡邊後期4～5期頃の弥生時代後半頃と考えておきたい。6の須恵器蓋や9の土師器甕は周囲の遺構からの混入と想定される。

7号竪穴建物（第22図）は、調査区南側に位置し、その大半が調査区外である。南北1.0m+ α 、東西2.0m+ α 、深さ10cmを測る。

出土遺物（第27図11・12）は天井部が丸味を持ち、口縁端部の返りが無い須恵器蓋が見られる事から、中村Ⅳ-2期頃の8世紀前半頃と12の土師器壺から古墳時代前期頃の両方の時期を想定しておく。

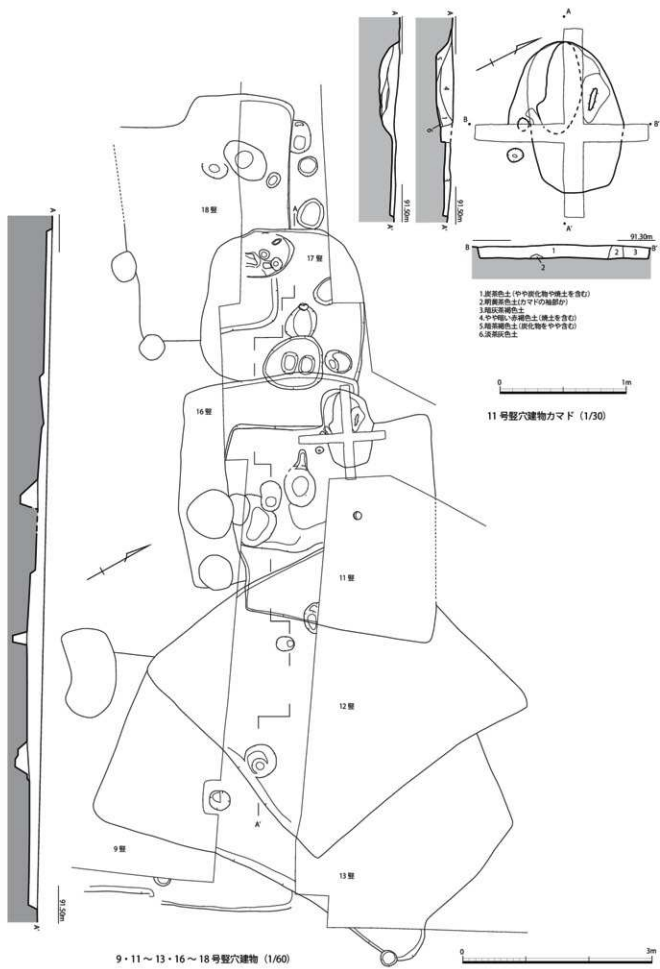
8号竪穴建物（第24図）は、調査区東側に位置し、6・9・14号竪穴建物に切られる。南側の一部で壁際溝の可能性のある溝が検出されている。想定規模は、直径約6.0mの円形か。

出土遺物（第27図13～15）は、くの字状口縁の弥生土器甕や石包丁が見つかったものの、明確な時期比定は困難である。ただ、円形住居と想定していることを考えると弥生時代中期後半頃に収まるものか。13の須恵器片は14号竪穴建物の埋没過程の混入と想定される。

9号竪穴建物（第22図）は、調査区中央やや東に位置し、8号竪穴建物を切り、13号竪穴建物に切られる。規模は南北約5.2m、東西約3.8m、深さ約10cmを測る。南側に張り出しを有し、平面形状は長方形を呈する。

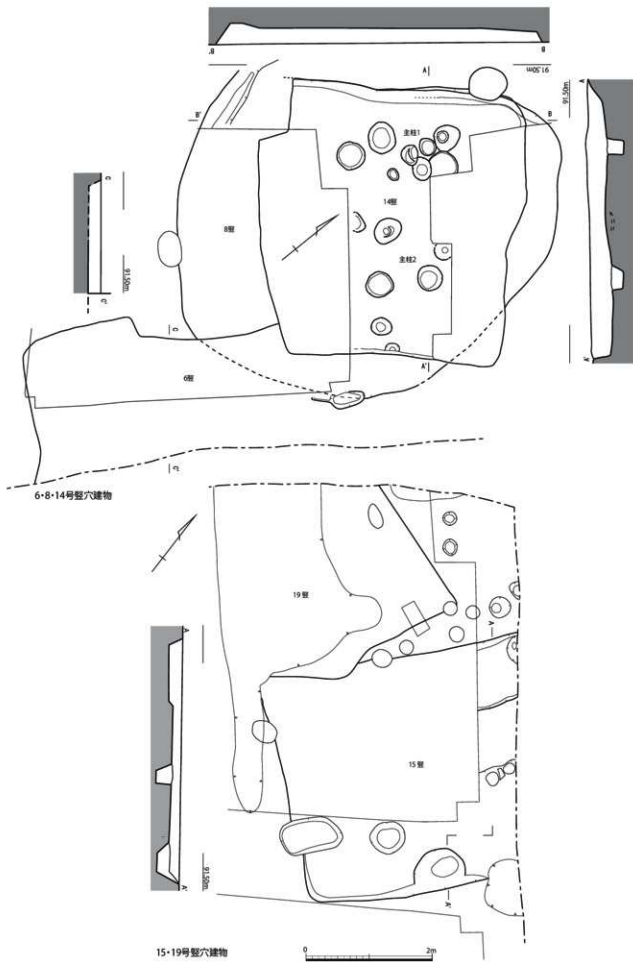
出土遺物（第27図16・17）は、8世紀代の土師器甕とくの字形口縁の弥生土器甕が見られる。切り合いなどから弥生時代後期後半に収まるもので、16の土師器甕については、別遺構からの混入であろう。

10号竪穴建物（第22図）は、調査区南側に位置し、4号竪穴建物を切ると想定される。規模は、南北3.0m、

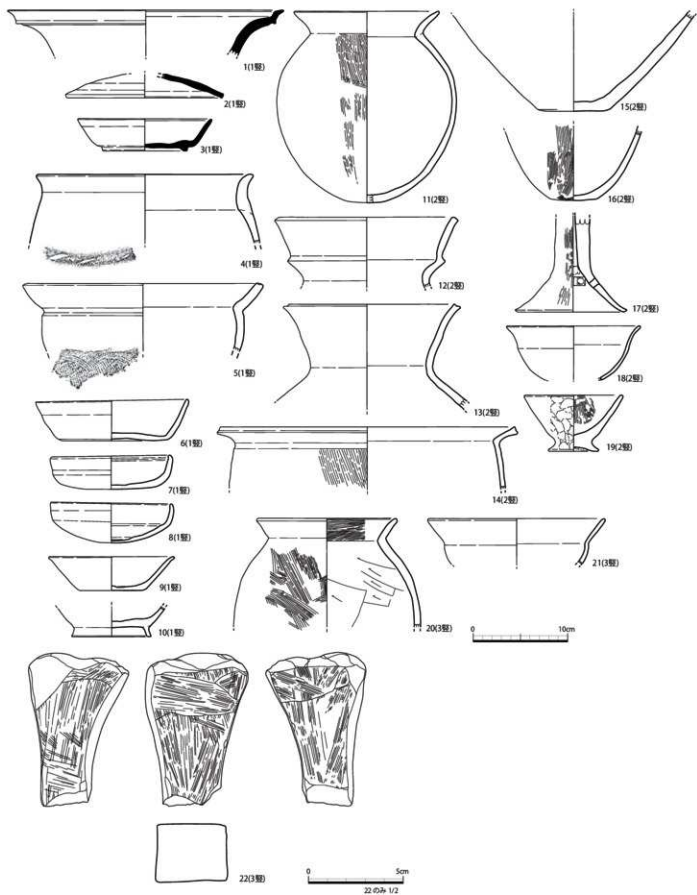


9・11～13・16～18号竪穴建物 (1/60)

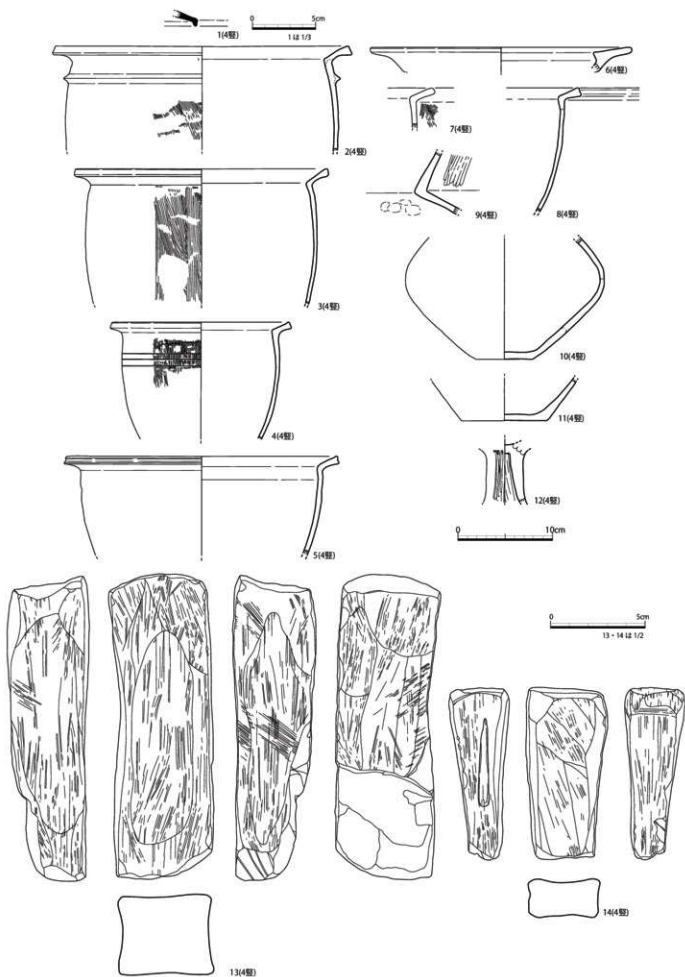
第23図 9・11～13・16～18号竪穴建物実測図 (1/60, 1/30)



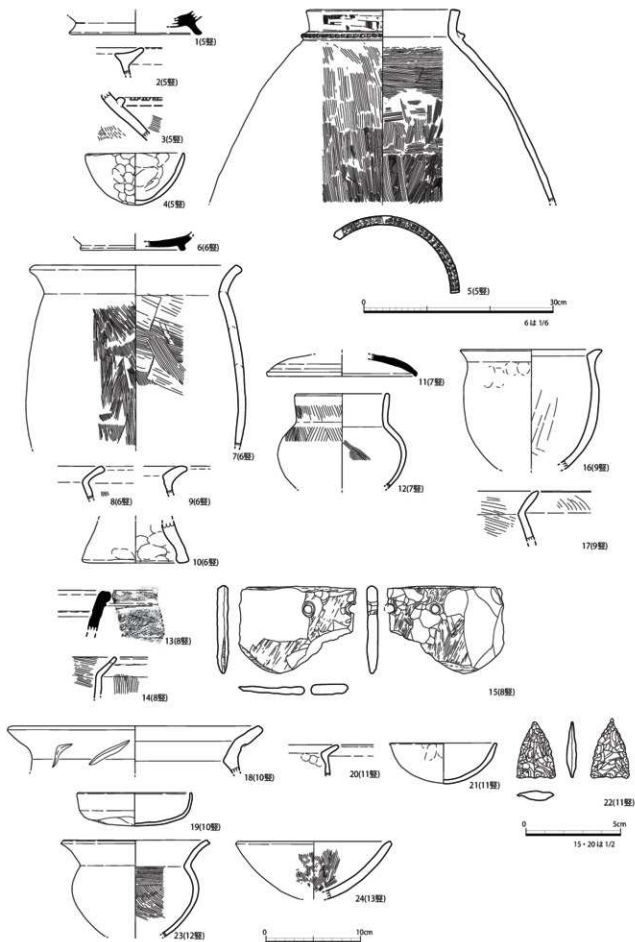
第 24 图 14・15・19 号竪穴建物实测图 (1/60)



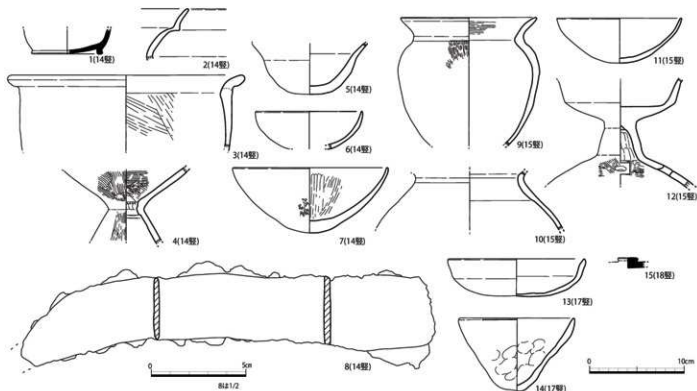
第 25 図 1～3 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/2)



第 26 图 4 号竖穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/3、1/2)



第 27 图 5 ~ 13 号竖穴建物出土遺物実測図 (1/6、1/4、1/2)



第28図 14・15・17・18号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、1/2)

東西4.0m、深さは約8cm程度と浅い。平面検出で南側は削平を受けたものと考えられる。

出土遺物(第27図18・19)は、口縁部が強く外反する土師器甕と底部が丸底で口縁部が直立気味に立上る土師器環が見られる。8世紀初頭から前半頃か。

11号竪穴建物(第23図、写真図版11)は、調査区中央よりやや北側に位置し、12・16号竪穴建物と3号土坑を切る。規模は、南北約3.4m、東西3.8m、深さ約5cm程度と浅い。東側にカマドが敷設される。北側は削平を受けたものと考えられる。

出土遺物(第27図20～21)は、口縁部が外反する土師器甕などから、8世紀代と想定しておきたい。

12号竪穴建物(第23図)は、調査区中央よりやや北側に位置し、11号竪穴建物に切られ、13号竪穴建物を切る。規模は、南北約4.2m、東西4.0m、深さ約10cmを測る。平面形状はほぼ方形を呈する。

出土遺物(第27図23)は、口縁部が外反し口径が胴部よりも大きく開く土師器甕から古墳時代前期頃であろうか。

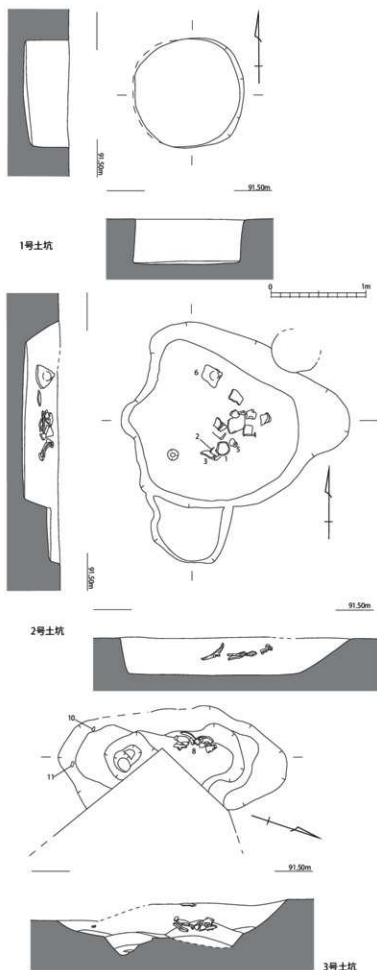
13号竪穴建物(第24図)は、調査区中央よりやや北側に位置し、12号竪穴建物に切られ、9号竪穴建物を切る。規模は、南北約4.0m、東西約5.7m、深さ約15cmを測る。平面形状は長方形を呈する。

出土遺物(第27図24)は、弥生土器鉢が見られる。

14号竪穴建物(第24図)は、調査区東側に位置し、6・8号竪穴建物を切る。規模は、南北4.2m、東西4.4m、深さ30cmを測る。平面形状はほぼ方形を呈する。また、主柱穴は判然としない。北側に比較的深い2基のピットがあるものの、南側に明瞭な柱穴を確認出来なかった事から、ここでは2本柱の建物と想定しておく。

出土遺物(第28図1～8)は、外反しながら外側に開く二重口縁壺、小型丸底壺、土師器環、支脚のほか、鉄鎌が見られることから、重藤1期頃の古墳時代前期頃と想定される。1の須恵器環、3の土師器甕は周辺遺構の混入と考えられる。

15号竪穴建物(第24図、写真図版4)は、調査区北端に位置し、19号竪穴建物に切られる。屋内土坑が見られるが主柱穴は判然としない。規模は、南北3.7m、東西3.8m、深さ約20cmを測り、方形を呈する。



第29図 土坑実測図(1/40)

出土遺物(第28図9~12)は、口縁部は緩やかに外反し、肩部が若干張る土師器甕や土師器高坏、鉢が見られることから、重藤1期頃の古墳時代前期頃と想定される。

16号竪穴建物(第24図)は、調査区中央よりやや北側に位置し、11号竪穴建物に切られる。規模は、南北約2.7m、東西約3.1m、深さ約7cm程度と浅い。平面形状は長方形を呈する。図示可能な遺物は出土しなかった。

17号竪穴建物(第23図)は、調査区中央よりやや北側に位置し、16・18号竪穴建物に切られる。規模は、南北約2.6m、東西約2.4m、深さは約8cm前後で、平面形状は隅丸方形を呈する。

出土遺物(第28図13・14)は、底部が緩やかな丸底で口縁部がやや外傾する土師器環や手捏ねの鉢などから、8世紀前半頃か。

18号竪穴建物(第23図)は、調査区西側に位置し、17号竪穴建物を切る。規模は、南北約2.6m、東西約3.8m、深さは約10cmを測り、張り出しを持つ長方形を呈する。

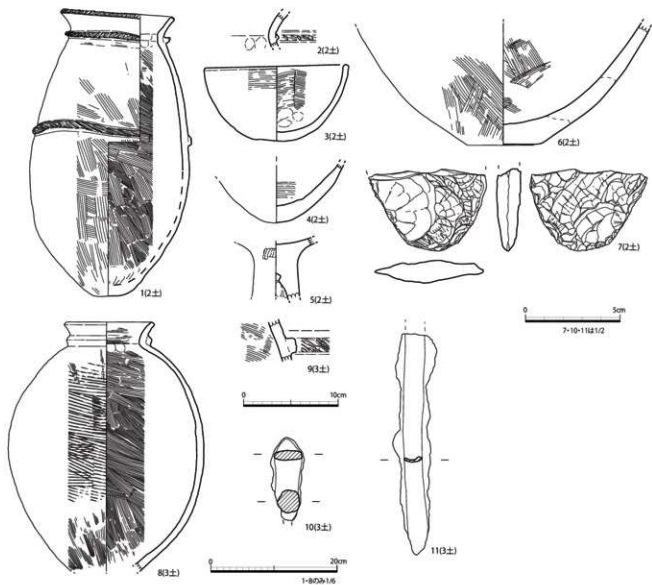
出土遺物(第28図15)は扁平の宝珠つまみを持つ須恵器蓋が見られることから、中村IV-II期頃の8世紀代と想定しておきたい。

19号竪穴建物(第24図)は、調査区北端に位置し、15号竪穴建物を切る。約半分は掘乱によって破壊され、西側の一部は調査区外である。規模は、南北3.5m、東西3.0m + αを測り、長方形を呈するか。遺物の出土は確認されなかった。

土坑(第29図、写真図版11)

調査区全体で土坑と判断できるのは3基であった。

1号土坑(第29図、写真図版11)は、調査区中央よりやや西側に位置する。南北1.1m、東西1.1m、深さは約50cmを測る。平面形状は円形で、底部は平坦で、その形状から貯蔵穴の可能性上がる。図示可能な遺物は出土しな



第30図 土坑出土遺物実測図 (1/6、1/4、1/2)

かった。

2号土坑(第29図、写真図版11)は、調査区西端、3・4・5号墓の西側に位置する。規模は南北2.5m、東西2.4m、深さはもっとも深い所で40cmを測る。平面形状は不定形で、底部はほぼ平坦である。

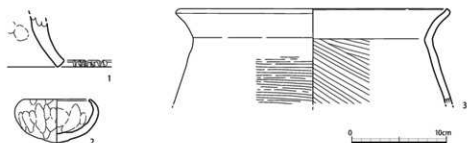
出土遺物(第30図1~7)は口縁端部と頸部、胴部に刻み目突帯が施されるレンズ状の底部を持つ弥生土器甕や平底の呈する弥生土器甕、弥生土器の鉢、高坏脚部のほか、石斧が見られることから、渡邉後期4期頃の弥生時代後期後半頃と想定する。

3号土坑(第29図、写真図版11)は、調査区中央よりやや北側に位置し、11号竪穴建物に切られる。規模は南北2.4m、東西0.9m+α、深さは最も深い所で約50cmを測る。平面形状は楕円形で底部は凹凸になっている。

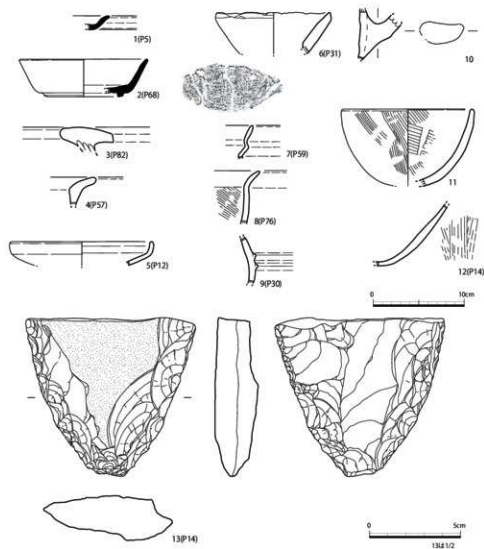
出土遺物(第30図8~11)は外面にタタキを持ち口縁部は緩やかに外反し頸部に三角突帯が施される弥生土器甕、鉄鏝・鏟が見られる。渡邉後期5期頃の弥生時代後期末頃を想定しておきたい。

溝状遺構(第17図)

調査区東端から北西に向かって伸び、9・14号竪穴建物に切られる。幅約0.7m、長さ6.5m+αで深さは10cm程度で浅い。



第31図 溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)



第32図 その他の出土遺物実測図 (1/4、1/2)

出土遺物(第31図)は、端部に刻み目を施す弥生土器支脚や手捏ねの鉢などが見られる。3のくの字口縁を持つ弥生土器甕や14号竪穴建物に切られている事などから弥生時代後期後半頃と考えておきたい。

その他の出土遺物(第32図)

ピットは、調査区全体で多数確認されている。また、生活遺構が多く確認される南東側の方で多く確認されていることから、掘立柱建物や竪穴建物の主柱穴であった可能性も考えられる。

出土遺物は、検出時に出土したものとおわせて須恵器高台付坏や弥生土器甕の他、土師器の甌片や石斧などが見られる。

第4表 2次調査墳墓計測表

墳墓番号	遺構番号	種類	方位角	墓域			3体部			出土物
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	
19	6号墓	竈形	310°	150	75	30	-	-	-	
20	2号墓	石棺	309°	132+α	88	24	116+α	44	24	
21	3号墓	石棺	279°	252	128	24	180	56	24	
21	1号墓	土坑	315°	204	92	32	168	60	24	弥生土器
21	5号墓	土坑	245°	152	120	32	72	28	20	
21	7号墓	土坑	353°	216	104	32	108	50	28	
21	4号墓	土坑	269°	164	68	24	-	-	-	弥生土器

V 総括

1・2次調査の事実報告を行ったが、調査成果を以下にまとめる。

検出遺構は1・2次調査で喪棺墓5基（うち小児用3基）、石棺墓11基（うち小児用2基）、石蓋土坑墓3基（うち小児用1基）、土坑墓5基の墳墓群と竪穴建物20軒、掘立柱建物1棟、土坑10基、ビット多数の生活遺構が発見された。今回の開発対象地内のうち、南西側には砂層が広がり、巨礫混じりの微高地の中でも比較的土壌の安定した砂及び小礫層を選んで密集して遺構を掘り込み、墳墓と生活域が近接しつつも領域を違えて営まれていることが明らかとなった。なかでも墳墓群には河原石を使用したり、地山の巨礫を側壁に利用した石棺墓などが見られ、立地条件を巧みに活かした古代人の苦勞を垣間見ることが出来た。

さて、これらの遺構が営まれた時期であるが、墳墓と生活遺構ではその存続年代幅にズレがあるため、それぞれの変遷について纏める。墳墓群は概ね弥生時代後期中頃から古墳時代前期の時期幅に収まるものと想定され、南東から南西方向に列状に墓域を形成している。その契機となったのは弥生時代後期中頃（渡邊後期Ⅱ期）の1次13号喪棺墓で、墳墓群で最も古く、市内でも類例の少ない時期の墳墓である。ところが喪棺は継続せず、後期末（渡邊Vb期）の1次15号喪棺墓まで間をおくことになる。市内の大型成人用喪棺の調査事例では数基が墓域の特定範囲を占有し、その墳墓を契機として石棺や土坑墓による列状墓が形成されることが多いことから、成人用喪棺の被葬者は特定集団あるいは個人の墓と判断される事例が多い。本遺跡でも同様に1次13・15号墓の所在する1次調査区南東側が中心的墓域となり、それを契機として後期末～前期にかけて墳墓群が営まれていたものと想定されよう。そしてそれらの墳墓は1次1・2号墓、4・7号墓、5・8・9号墓のように並列（系列）しつつ縦列に形成される。その変遷は付随する小児用喪棺（1次3号喪棺が渡邊Va期、1次6号喪棺が渡邊Vb期、2次6号喪棺が渡邊Ib期）から、北西側が古く南東側が新しいことになる。成人用喪棺周辺から列状に広がったというよりは成人用喪棺を起点としつつ親族系譜による墓域経営が行われた結果、列状を意識したのとなったというところであろうか。そのため、2次3・4・5・7号墓のように列から離れたものも見られる。また副葬物では、ガラス小玉が出土した1次11・14号墓、鉄鏝が出土した2次6号喪棺墓、赤色顔料が大量に埋納されていた1次6号墓がある。いずれも1次13・15号墓の成人用喪棺墓を中心とした範囲に該当しており、また14号墓を除いて小児墓であることも特徴的で、後期末を中心に小児墓に副葬物が出土するこの時代の傾向とも合致するものである。

さらに、1次1号土坑は比較的新しい掘り込みにも関わらず時期の古い遺物が出土し14号墓を破壊していることから、近年の掘削坑でその周辺の遺構を掘削した結果の可能性もある。13号墓に後期末の小児棺の混入が見られことや、昭和57年に発見された壺棺（第2-1図）が後期末（渡邊Vb～I期）のもので、この周辺の出土と推測（土地所有者への聞き取りより）されることから、1号土坑周辺にはさらに墳墓が所在していた可能性も考慮する必要があるだろう。

次に生活遺構の変遷である。生活遺構の多くは2次調査区側の東側に集中している。2次調査区は全体の遺構検出は行うものの、掘り下げは基礎設置範囲のみで、出土遺物量が少なく、また切り合う遺構間での遺物混入が多々見受けられるため、その所属時期の決定は困難であった。そこで、各遺構の主要出土遺物などからその所属時期を決定し、おおむねの遺構変遷を説明するものとする。

検出遺構中で最も古い時期のものとして2次4・8号竪穴建物がある。4号は表面の削平のため不定形状を呈しているが、8号同様に周囲に広がるビットなどが主柱穴となる円形住居になるものと考えられ、概ね中期後半とみて差し支えないだろう。続く時期は後期代に2次1・2号土坑が見られ、ほかに1次1号土坑周辺に遺構が所在した可能性があるが詳細は不明である。いずれにしても生活遺構が増加するのは後期末から古墳時代前期

頃で、2次2・3・5・6・9・12～15号竪穴建物などがそれにあたり、墳墓群とは明確に距離をおいた場所に造営される。その後一旦中・後期代（※平成29年実施の3次調査で確認）の遺構は見られなくなるが、7～8世紀代において、1次1号竪穴建物・1号掘立柱建物、2次1・7・10・11・17・18号竪穴建物などの生活遺構群が墳墓にかなり近い位置に営まれるようになる。

このように、河川氾濫のリスクが高く、地盤的にも良好ではない本遺跡において、弥生時代中期から古代に至るまで途中若干の空白期間はあるものの、ほぼ継続的に集落が営まれていることは非常に重要な意味をもつものと考えられる。日田盆地における弥生時代中期に成立した集落の多くは、短期間の集落経営を行いながら、河川域などの小範囲内を移動しつつ継続するケースが多く、同一立地内で長期間継続するものは限られている。このことから、柳ノ本遺跡は場所を替え難い非常に重要な拠点集落であったと想定され、河川交通などによって重視される場所であったものと考えられよう。

さて、以上のように評価される本遺跡であるが、実際の範囲は不明な点が多く、いまだ謎な部分も多い。しかし、昭和57年の壺棺発見以来止まっていた歴史の扉が今回の調査によって開かれた意義は大きいと言え、日田盆地の歴史解明に重要な役割を果たすものと考えられることから、今後の周辺開発に注視しながら詳細を把握していく必要があるだろう。

＜時期比定参考文献＞

重藤輝行 「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』第5回九州前方後門墳研究会発表資料2002

『筑後川流域における古墳時代集落の展開-特に浮羽地域を事例として-』平成19年度九州考古学会総会発表資料・資料集2007

田嶋博之 「日田平遺跡出土土器の編年-特に土師器を中心として-」『平遺跡1』福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会

田辺昭三 「筑前大宰」角川書店1981

中村 浩 『和泉陶器の研究-筑前産の基礎的考察-』柏書房 1981

横口達也 1979 「4. 壺棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX1中巻 福岡県教育委員会

渡邊隆行 2014 「調査総括-日田市域の弥生土器の変遷と次上遺跡出土土器の特色」『次上遺跡VI』日田市埋蔵文化財調査報告書第112集 2014

2017 「筑後川上流域の古式土師器の状況」『九州島における古式土師器-第19回発表資料』九州前方後門墳研究会



第33図 遺構変遷図 (1/300)



調査区全景 (上が南)



調査区全景 (画面上が南西)



① 3号墓検出状況(北西から)



② 3号墓完掘状況(西から)



③ 6号墓検出状況(東から)



④ 6号墓完掘状況(南から)



⑤ 13号墓(北から)



⑥ 13号墓(西から)



⑦ 15号墓(南から)



⑧ 15号墓(東から)

写真図版 3
(1次調査)



① 1・2号墓検出状況 (南西から)



② 1・2号墓完掘状況 (南西から)



③ 1号墓検出状況 (南西から)



④ 1号墓完掘状況 (南西から)



⑤ 2号墓検出状況 (北東から)



⑥ 2号墓完掘状況 (北東から)



⑦ 4号墓検出状況 (南から)



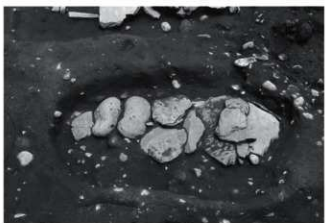
⑧ 4号墓須恵器出土状況



① 5号墓検出状況 (南西から)



② 5号墓完掘状況 (北東から)



③ 8号墓検出状況 (南西から)



④ 8号墓完掘状況 (南西から)



⑤ 9号墓完掘状況 (北から)



⑥ 11号墓検出状況 (南西から)



⑦ 11号墓検出状況 (南西から)



⑧ 11号墓ガラス小玉出土状況

写真図版 5
(1次調査)



① 14号墓検出状況(西から)



② 14号墓完掘状況(西から)



③ 16号墓完掘状況(南東から)



④ 7号墓完掘状況(南東から)



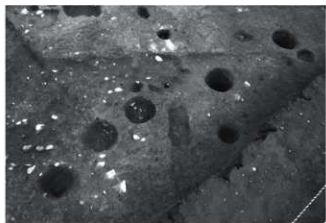
⑤ 10号墓検出状況(南から)



⑥ 12号墓完掘状況(南から)



⑦ 17号墓検出状況(北から)



⑧ 1号竪穴建物完掘状況(南から)



① 1号竪穴建物カマド完掘状況 (南から)



② 1号掘立柱建物 (西から)



③ 1号土坑 (北から)



④ 2号土坑 (南東から)



⑤ 6号土坑 (南東から)



⑥ 7号土坑 (西から)



⑦ 調査区東壁 (1号土坑)



⑧ 調査区北壁

写真図版 7

(1次調査)



3-1



6-3



8-1



6-1



6-4



8-2



6-2



16-3



7-1



16-13



16-37

7-2



16-16



16-26



調査区南側発掘状況（西から）



調査区北側発掘状況（西から）

写真図版 9
(2次調査)



① 1号墓石蓋検出状況 (南から)



② 1号墓発掘状況 (東から)



③ 2号墓石蓋検出状況 (東から)



④ 2号墓発掘状況 (南から)



⑤ 3号墓石蓋検出状況 (南から)



⑥ 3号墓発掘状況 (東から)



⑦ 4号墓発掘状況 (東から)



⑧ 5号墓石蓋検出状況 (南から)



① 5号墓発掘状況 (西から)



② 6号墓検出状況 (西から)



③ 6号墓発掘状況 1 (北から)



④ 6号墓発掘状況 2 (東から)



⑤ 7号墓石蓋検出状況 (東から)



⑥ 7号墓発掘状況 (東から)



⑦ 1号竪穴建物発掘状況 (南から)



⑧ 2・3号竪穴建物発掘状況 (北東から)

写真図版 11
(2次調査)



① 11号竪穴建物発掘状況(東から)



② 15号竪穴建物発掘状況(南から)



③ 1号土坑発掘状況(南から)



④ 2号土坑遺物出土状況(南から)



⑤ 2号土坑発掘状況(西から)



⑥ 3号土坑遺物出土状況(南から)



⑦ 調査区東壁土層(西から)



⑧ 調査区南壁土層(北から)



19-1



19-2



25-11



19-3



25-2



25-6



25-19



26-13 ①



26-13 ②



27-5



27-7



27-19



28-8



27-15 ①



27-15 ②



28-13



30-1



30-8



30-10



30-11



30-3

報告書抄録

ふりがな	やなぎのもといせき 1・2じ
書名	柳ノ本遺跡 1・2次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第135集
編著者名	渡邊 隆行、上原 翔平
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島 2-6-1
発行年月日	2018年3月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柳ノ本遺跡 1次	大分県日田市大字竹田	44204-6	204163	33° 18' 30"	130° 56' 35"	140607～ 140724	249㎡	記録保存調査
2次						150708～ 150904	496㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳ノ本遺跡	墓地・ 集落	弥生 古代	羨棺墓、石棺墓、土坑墓、竪穴建物、掘 立柱建物、土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、ガラ ス小玉、鉄器、石器	

要 約	<p>遺跡は三隈川右岸に広がる沖積微高地上に位置する。昭和57年に羨棺が発見されて以来、弥生集落として知られるものの、その詳細は長らく不明で、今回の2次に亘る発掘調査によって、弥生時代中期後半から古代に至る密集度の高い集落と墳墓群で構成される遺跡であることが明らかとなった。砂礫層の地山を巧みに利用しながら集落と墳墓は営まれており、墳墓の中には市内では拠点集落に付随することが多い大型成人用羨棺墓があることから、この遺跡が通常の集落とは異なり、重要度が高い河川交通の拠点集落であったものと想定された。</p>
-----	--

柳ノ本遺跡 1・2次

日田市埋蔵文化財調査報告書第135集

2018年3月28日

編集 日田市教育庁 文化財保護課

877-8601 大分県日田市田島 2-6-1

発行 日田市教育委員会

877-8601 大分県日田市田島 2-6-1

印刷 尾花印刷株式会社

877-0026 大分県日田市田島本町 8-8



日田市